V　平成19年度の主要な事業動向

1　来館者サービスの状況

（1）入館者、貸出、レファレンスサービス等の状況

平成19年度から祝日を開館することとした（18年度までは日曜日と重なったときのみ開館）。また、年度末の整理休館日の短縮もあり、19年度の開館日数は、18年度に比べ14日増加し282日となった。

入館者数は、688,915人で、13年度以来6年ぶりの増加（前年比108%）となった。開館日の増加が最も大きな要因ではあるが、1日当たりの入館者数も、2,380人から2,443人となり昨年度を2.7%上回った。

個人貸出は、図書は386,209冊で前年を9%上回ったが、視聴覚資料は微減であった。両者を合わせると、450,117点で3年連続の増加であった。

レファレンスサービスの件数も35,756件で15年度以来5年連続の増加（前年比112%）となった。19年度来館者アンケート調査（11ページ参照）でも、「調査相談サービスを使ったことがある」との回答が37%で、前年より4%増えている。レファレンスを特に重点をおいて取り組むサービスとしてきた成果があがってきたものといえる。

11年度頃から、資料費激減の影響もあり利用者が減少し続けてきたが、ようやく一昨年頃から利用が上向く兆しが見え始め、19年度は様々な統計数値で利用の回復が確認されることとなった。

（2）インターネットを利用したサービス

19年3月から始まった、インターネットによる貸出中図書予約、利用状況照会のサービスの利用者（パスワード発行数）は20年3月には2,205人になった。オンラインでの予約件数は、5,077件で、予約全体の38%にあたる。カウンターでの予約も8%増えているので、オンライン分は純増といえる。

ホームページの閲覧件数は、17%の増加、携帯サイトの閲覧件数は2倍を超える増加、蔵書検索ページは54%増、横断検索ページは15%増であった。

（3）児童に対するサービス

児童図書室の19年度の貸出冊数は、前年度より約5%増の73,697冊であった。利用促進のために、「ともだち」、「冒険」、「家族」など2ヶ月ごとにテーマを変えて関連図書の展示と貸出を行ったほか、新着図書を紹介する『新しく入った本』(月刊)、おすすめ本を紹介する『じどうしつだより』(季刊)を発行した。おはなし会は、午前を幼児向け、午後を小学生向けとして、年間19日38回行った。また、子どもたちが様々な行事や季節感を味わえるよう折り紙や工作などで室内の飾り付けを工夫した。

（4）障害者に対するサービス

視覚障害者への対面朗読の延べ利用者数は330人、対応した朗読者数は236人、朗読時間は475.5時間で、前年に比べ13%、14%、11%の増加であった。視覚障害者資料の貸出は1,380タイトル、他館からの借受による貸出は1,349タイトルで、45%、69%の増加であった。作成した録音図書は、カセットテープ27タイトル、DAISY 8タイトルであった。また、『視覚障害者資料室新着図書案内』第1号及び『録音図書・点字図書目録』2007年版を発行した。

心身障害者への郵送貸出は、利用者数141人、貸出冊数433冊で、23%、63%の増加であった。

（5）各コーナーの状況

ア　地域資料コーナー

地域資料コーナーは、愛知県の人・事物について書かれた資料、県内行政刊行物、その他愛知県に関する資料の

幅広い収集を目指し、平成19年度末現在、図書59,763冊、雑誌968タイトルを所蔵している。特に18年度からは大正・昭和初期の詩集など愛知県関係近代文学資料を重点的に収集している。19 年度には新しく受入れた資料の中から「名古屋豆本」、「吉田初三郎の鳥瞰図」を取り上げ展示で紹介した。

イ　ティーンズコーナー

当コーナーを設置してから3年が経過した。コーナーの図書約5,000冊のうち、平均20%が常に貸出され、活発に利用されている。

20年3月からは企画「てこぽん」を始めた。「ティーンズコーナーポイントGet大作戦！」の略で、おすすめ本の紹介カードを書くとポイントがたまり、図書館グッズと交換できるという利用者参加型の新企画である。

ウ　多文化サービスコーナー

多文化サービスコーナーは本格運用から2年を経過し、各言語ともすっかり利用が定着した感がある。資料はハングル・ポルトガルの新刊書を中心に購入、平成19年度末現在の資料数は約2,800冊となり、資料の増加に伴いコーナーも拡張した。広報についても範囲を拡大し、これまでちらしを送付していた留学生関係施設に加え、県内市町村の国際交流団体にも案内を配布した。

エ　ビジネス情報コーナー

コーナー開設から3年が経ち、資料群もある程度充実してきた。データベースも新たにJDreamⅡ（科学技術医学文献データベース）、レクシス・ネクシス（判例・法令データベース）の2点を導入した。19年3月に2階雑誌部門から移した雑誌もよく利用された。コーナーの刊行物として『ビジネス資料ガイド』を毎月発行し、その都度ホームページ上でも閲覧できるようにした。

他館からビジネス情報コーナーのサービスについての講師の派遣依頼があり、2館で講義を行った。また、岡崎市立中央図書館から展示のため、職業・資格関連の資料の貸出要請があり、図書約200冊を約2ヶ月貸出した。

オ　国連寄託図書館

当館は、平成3年の開館時から国連寄託図書館の指定を受けて、国連資料の閲覧・貸出を行っている。19年3月、寄託図書館制度が変更され、全ての出版物が配布される「Print plus(印刷物付き)」と基礎資料の配布となる「Regular(通常)」の2種類に改められるとともに、あわせて寄託料金が大幅に引き上げられた。当館では、これまで国連発行の資料の大部分が送付されてくる「Full(全部寄託)」の寄託図書館であったが、国連文書の基本となるドキュメントや公式記録等の配布を受けることができる「Regular」に切り替えることとなった。

19年9月29日には、国連資料の有用性と利用の仕方を広く知っていただくため、愛知大学図書館主催、当館の協力で講演会「国連資料から世界を見る」（講師は川辺一郎愛知大学教授）が、5階大会議室で行われた。

(6) 新しい飲食店の開店

5階のレストラン「宙」は、20年2月末日をもって営業を終了することになった。レストラン及び自動販売機コーナーは、館内唯一の飲食施設として、利用者サービスの一端を担う重要な施設であるため、図書館利用者のニーズを考慮し飲食店を公募により選定した。その結果、20年3月から「スガキヤ」が営業することとなった。

2　市町村立図書館を介したサービスの状況

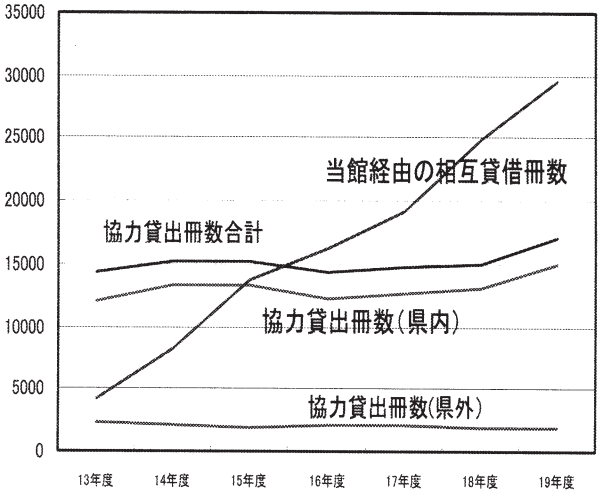
（1）協力貸出、市町村間相互貸借、レファレンス

平成18年度に引き続き、19年度の図書館サービス計画において特に重点をおいて取り組むサービスの一つとし

て、市町村立図書館への支援、県域全体へのサービスを掲げ、その達成度の指標として県内の図書館への協力貸出冊数を13,500冊(前年比103%)とした。19年度の県内図書館への貸出冊数は15,062冊（前年比115%）となり目標を上回ることができた。県内市町村立図書館及び公民館図書室への貸出が、昨年12,357冊から14,460冊（前年比122%）と増加した結果が大きい。反面、大学図書館、学校図書館、その他図書館への貸出は、大学図書館への貸出が昨年度の109冊から236冊に増加したものの、699冊から602冊と、14%の減少であった。

県外の図書館への19年度の貸出冊数は1,987冊で18年度の1,990冊に比べ大きな変化は無く、県内の図書館への貸出をあわせた協力貸出の合計は17,049冊（対前年比113%）であった。

当館の搬送を利用した市町村立図書館間の相互貸借の冊数は、18年度の24,818冊から19年度29,527冊（前年比119%）と依然増加が続いている。



市町村立図書館で回答が得られなかった利用者からの質問について、愛知県図書館は市町村立図書館からの依頼により、調査し回答している。平成19年度に図書館を経由して、受け付けたレファレンスの件数は278件で、内訳は、口頭によるもの4件、電話によるもの177件、手紙、FAX、メール等の文書によるものが97件となっている。

（2）市町村に対する人的サービス

図書館の設置や新館の建設を検討する市町村に対し、情報の提供や職員の参画を含めた支援を行った。19年度には、岡崎市及び瀬戸市の図書館に職員各1名を2年間の予定で派遣した。また、小牧市立図書館整備計画委員会に委員として職員1名を派遣し「新小牧市立図書館建設基本構想」の策定に加わった。20年度も引き続き同委員会委員として、職員1名を派遣する予定である。

市町村立図書館支援の一環として県内各団体主催の研修会へ、職員を講師として派遣した。19年度は県内で実施された研修会へ延べ12名の講師を派遣した。このほかに三重県立図書館、東京都市町村立図書館長協議会、石川県公共図書館協議会に3名の職員を講師として派遣している。

（3）大学図書館、高等学校図書館との連携

愛知、岐阜、三重、静岡県内の公立図書館と大学図書館により、館種を超えた連携・協力を進めるため設立された東海地区図書館協議会に、理事館として参加している。同協議会の「資料相互利用協定」参加の大学図書館に221件の資料を貸し出し、複写1件を受け付けた。また73件の資料を借り受け、複写13件を依頼した。

大学図書館と公共図書館間の相互貸借の物流を確立する目的で、東海地区図書館協議会の愛知県内の理事館である名古屋大学、名古屋市立大学、南山大学の図書館と愛知県図書館の間で、18年5月から開始した定期搬送便の実証実験を19年度も継続した。公立図書館から大学図書館への貸出は325冊(対前年比212%)、借受は163冊(対前年比236%)と、搬送便の利用が大幅に増加した。

高等学校への支援サービスを中心に、学校への支援サービスを引き続き実施した。協力貸出冊数は10校337冊であった。その内訳は高等学校8校303冊、小学校2校34冊であった。高等学校への貸出のうち4校240冊は、依頼によりテーマに沿った図書リストを作成し貸出したものである。

また、18年度から高等学校へ出張しブックトークを行っている。19年度は県立岡崎北高等学校へティーンズコーナーの担当者を講師として派遣し、1年生3クラスに対し「伸びる」「好きなことをして生きていく」「サバイバル」の3題のブックトークを実施した。